

# 中国人日本語上級学習者の語用論的特徴の一考察

—依頼に対する断りパターンから—

蒙韞

## 要旨

本稿は、人間関係を維持するために重要であるといわれる切り出しと終結部に焦点を当て、中国人日本語上級学習者、社会人の日本語母語話者と中国語母語話者の断りパターンの差に統計的な有意性を検討することにより、中国人日本語上級学習者の語用論的特徴を明らかにしたものである。

明らかになったことは、まず断りの切り出しには中国人日本語上級学習者は親しい相手に対して詫び先行型またはためらい・相づち先行型を日本語母語話者と中国語母語話者の中間位置に使用したり、日本語母語話者より過剰に使用したりするが、理由先行型を日本語母語話者より過少に使用する傾向がある。次に断りの終結部には中国人日本語上級学習者は同等の相手に借金を頼まれる場面と目上の相手に表作成を頼まれる場面では、代案終結型を日本語母語話者と中国語母語話者の中間位置に使用したり、日本語母語話者より過少に使用したりするが、理由終結型を日本語母語話者より過剰に使用する。また結論終結型を日本語母語話者より過少に使用する傾向がある。

キーワード：語用論的特徴 中国人日本語上級学習者 断りパターン  
ポライトネス・ストラテジー 量的差異

## 1. はじめに

Hymes (1972) がコミュニケーション能力という概念を提示し、第二言語習得研究に大きな影響を及ぼした。その後、Canale and Swain (1980) は Hymes の概念を文法能力、談話能力、方略的能力と社会言語能力に細分化した。これがきっかけとなり、1980年代には、外国語学習者の中間言語を語用論的観点から考察した研究が多く見られるようになった。1980年代後半の第二言語習得語用論は比較文化語用論が中心であった。しかし、1990年代に入ると、教育現場における語用論的能力の習得過程に目が向けられ、学習者の中間言語体系の発達を通時的にとら

えることに関心がよせられるようになった（関山 2004）。こうした研究は特に「依頼」「謝罪」「感謝」「断り」などの発話行為に焦点を当てたものが多い。

断りにおける日本語学習者の語用論的特徴を考察した研究は少なくないが、これまで断りの切り出しと終結パターンは別々に考察されてきた。断りの切り出しパターンに注目した代表的なものとしては、藤森（1994）と山口（1997）が挙げられる。藤森（1994）の分析はパーセンテージによる記述統計レベルにとどまっているが、山口（1997）の分析はカイニ乗検定により統計的有意差を検討している。一方、断りの終結パターンに注目した代表的なものとしては、伊藤（2004）が挙げられるが、その分析はパーセンテージによる記述統計レベルにとどまり、結果の一般化という課題が残っている。また、筆者の調べる限り、断りの切り出しと終結パターンの両方に焦点を当て日本語学習者の語用論的特徴を統計検定により検討した研究は見当たらない。そこで、本稿は、依頼に対する断り場面において、日本で日本語を学ぶ中国人日本語上級学習者（以下では JSL と略す）、社会人の日本語母語話者（以下では JJ と略す）と中国語母語話者（以下では CC と略す）を対象とし、人間関係を維持するために重要であるといわれる切り出しと終結部に用いられる JSL、JJ、CC の言語表現を比較・分析し、その差に統計的な有意性を検討する。それにより、JSL の語用論的特徴を明らかにすることを目的とする。

## 2. 先行研究と研究課題

これまで行われてきた主要な先行研究を概観し、その成果と課題を踏まえた上で、本稿における研究課題を示す。

### 2.1 先行研究の概観

断りにおける日本語学習者の語用論的特徴を考察した主要なものとして、生駒・志村（1993）、藤森（1994）、岡崎（1995）、伊藤（2004）、Roungtheera（2004）と蒙（2008）の研究が挙げられる。表 1 はこれら主要な先行研究をまとめたものである。

表 1 主要な先行研究の一覧表

主要な先行研究	研究目的	調査対象者 (グループ と人数)	学習者 の日本 語レベ ル	場面設定	調査 方法	分析方法 (統計手法 も含む)	結果の要約
生駒・志村 (1993)	要請・招待・申し出・提案に対する「断り」行為において、アメリカ人学習者の英語から日本語へ語用論的転移が見られるかを調べる。	・日本語母語話者：ハワイ大学の日本人大学院生 10名 ・英語母語話者：ハワイ大学のアメリカ人大学院生 10名 ・日本語学習者：英語を母語とするアメリカ人大学院生 10名	ハワイ大学における日本語最上級クラスを受講して4年目の大学生	・上下関係：目上、同等と目下	談話完成テスト	・Beebe等(1990)に従い、意味公式 <sup>1)</sup> を用いて、その発現順序・発現回数(パーセンテージ)・具体的な内容を分析。	以下の有害な語用論的転移が見られた。 1. 依頼に対する断りでは代案をあまり提示しない。 2. 友達に勧められた食べ物を断る際に「結構です」を多用する。 3. 地位が上の相手にも直接的な断りを多用する。
藤 森 (1994)	誘いに対する「断り」行為における日本に滞在する韓国人及び中国人日本語学習者の語用論的転移を探る。	・日本語母語話者：98名 ・中国語母語話者：来日しない中国人 14名 ・韓国語母語話者：来日しない韓国人 28名 ・日本語学習者：中国人日本語学習者 49名、韓国人日本語学習者 62名 協力者のうち、84%は学生、残りは会社員、教師、主婦など。	中級以上	・上下関係：目上(上司と教授)と同等 ・親疎関係：同等の場合のみ親、疎と嫌いの関係を設定。	談話完成テスト	・Beebe等(1990)の意味公式の分類を修正。 ・意味公式 <sup>2)</sup> の発現順序(最頻出の配列順序及び断りの切り出しパターン)、発現頻度及び発話連続数をパーセンテージにより分析、検討。	以下の語用論的転移が見られた。 1. 親しい相手に対しては、詫び先行型を使用しない。 2. {代案}の提示を多用する。
岡 崎 (1995)	Beebe等(1990)と生駒・志村(1993)で指摘された語用論的転移が韓国学習者にも見られるかを検証する。	・日本語母語話者：東京都内の日本人大学院生 20名 ・韓国語母語話者：ソウル市内の韓国人大学院生 20名 ・日本語学習者：東京都内の大学に留学中の韓国人大学院生 20名	上級以上	社会的身分ではなく、相手になるかならないかを区別する場面等、Beebe等と生駒・志村が用いた談話完成テストを手直した。	談話完成テスト	Beebe等が提案し、生駒・志村によって日本語訳された意味公式を使い、各グループから任意に抽出した10名に対して、各場面における特定の意味公式の使用回数を調べ、グループ間で比較。	学習者は、韓国語母語話者と日本人目標言語母語話者の中間に位置するということの結果には至らなかった。学習者は日本人に対して、母語である韓国語に特徴的な間接的断り、代案提示、文の中途止めを強化して使用している。

伊藤 (2004)	<p>勧誘と依頼に対する「断り」行為における、マレー語と日本語の学習者の語用論的能力と滞り期間の関係、マレー語と日本語の学習者語用論的特徴を考察する。</p>	<p>・日本語母語話者：日本人の社会人 52 名 ・マレー語母語話者：マレーシア人 大學生 68 名 ・日本語学習者：マレーシア政府派遣留学生 141 名とマラヤ大学日本語科 2 年生 80 名</p>	<p>滞り期間による 4 レベル。 1. 3 年 2. 2 年 3. 1 年 4. 滞りなし</p>	<p>・上下関係：目上（先生）と同等（友達） ・親疎関係：目上とともに親と疎の関係を設定。</p>	<p>談話完成テスト</p>	<p>・藤森(1994)の意味公式の分類を補足を加えた。 ・語用論的能力と滞り期間の関係に関する分析：各場面における意味公式の得点を分散分析により統計的処理。 ・語用論的特徴に関する分析：応答の順序と応答の最後に表れる最頻出の意味公式の頻度(パーセンテージ)に注目し分析。</p>	<p>・第二言語学習環境よりも外国語学習者のボライトネスは日本語母語話者との隔たりが大きく、第二言語学習環境では滞り期間が長くなるにつれ、学習者のボライトネスは日本語母語話者に近くなる。 ・応答の順序は全グループに共通して {詫び} {理由} の順序で始まる。 ・応答の最後に表れる意味公式において学習者に見られる {理由} の使用は、語用論的転移と考えられる。</p>
Roungtheera (2004)	<p>提案に対する断り表現におけるタイ人日本語学習者のタイ語から日本語への語用論的転移があるかを明らかにする。</p>	<p>・日本人タイ語学習者：大阪外国語大学の学生 20 名 ・タイ人日本語学習者：シンラバコーン大学の学生 20 名</p>	<p>両グループも当該言語の学習歴は 3 - 4 年、クラス</p>	<p>・上下関係：目上、同等と目下 ・親疎関係：同等では親と疎の関係、目下では親、疎と家族の関係を設定。</p>	<p>談話完成テストとオープンインタビュー</p>	<p>Beebe 等 (1990) が用いた意味公式を参考に、[付加詞]<sup>3)</sup>[理由][決意表明]の頻出する 3 つの意味公式を出現順序によりパターン化し、パーセンテージを分析。</p>	<p>タイ人が親しい目上と親しくない目上に対して用いる 2 つのパターンは、日本人が親しい同等の相手と疎遠な同等の相手に対して用いるパターンと同じであるため、タイ人学習者が転用すると誤解を引き起こす原因となる。</p>
蒙 (2008)	<p>友達からの依頼を断る場面において、滞りする中国人日本語上級学習者から日本語への語用論的転移があるかを考察する。</p>	<p>・日本語母語話者：日本の企業で事務職に就いている日本人会社員 49 名 ・中国語母語話者：中国の国営・民営の企業で事務職に就いている中国人会社員 107 名 ・日本語学習者：日本の大学・大学院に留学している中国人学生 59 名</p>	<p>全員日本語能力試験 1 級保持しており、上級レベルに該当</p>	<p>・上下関係：同等のみ ・親疎関係：親と疎の関係を設定</p>	<p>談話完成テストとオープンインタビュー</p>	<p>・藤森(1994)と伊藤(2004)の意味公式の分類を修正、補足し、それに対応する中国語を分析するための基準を作成。 ・各意味公式の使用頻度(パーセンテージ)に焦点を当てデータを分析。</p>	<p>・学習者は {言いさし}、{関係維持}、{共感}、{条件}、{間投詞的表出}、{呼称}、{非難}、{賞賛}、{その他} の使用については、語用論的転移が見られた。 ・ {理由}、{詫び}、{代案}、{ためらい}、{相づち} については、学習者は日本語母語話者と中国語母語話者のどちらよりも多く使用する。</p>

## 2.2 研究課題

先述したように、以上の先行研究には、断りの切り出しと終結パターンの両方に焦点を当て学習者、目標言語母語話者と学習者の母語と同じ言語を母語として話す話者の差に対する統計的な検討と研究結果の一般化に関する課題が残っている。また、社会文化的規範の会得が語用論的能力の習得に影響を与えると考えられるため、研究対象とする目標言語母語話者と学習者の母語と同じ言語を母語として話す話者は、学生と社会人のどちらに基準すべきかが議論されている。しかし、これまでの研究は学生を対象とし、学校の場面を調査したものが多い。学習者の語用論的特徴を明らかにするためには、社会文化的規範を会得していると考えられる社会人から基準データを収集し比較検証することも必要であろう。さらに、蒙（2008）で観察された学習者の語用論的傾向は統計的に検証できなかった。そして、切り出しと終結部はともにそれ以後の相手との人間関係を決定するため、十分に配慮する必要がある。したがってその両方を照らし合わせて考察する必要がある。これら課題を踏まえて、本研究は Brown and Levinson (1987) のポライトネス理論に基づき、日常生活で遭遇する可能性の高い場面において、中国人日本語上級学習者 (JSL)、社会人の日本語母語話者 (JJ) 及び中国語母語話者 (CC) の断りパターンがどう異なるかを、以下の2点に焦点を絞って考察する。

- (1) 断りの切り出しに JSL、JJ、CC がともに最も多く使用する上位3位<sup>4)</sup>のパターンにはどのようなものがあるか。また、3者の間は量的にどう異なるか。
- (2) 断りの終結部に JSL、JJ、CC がともに最も多く使用する上位3位のパターンにはどのようなものがあるか。また、3者の間は量的にどう異なるか。

## 3. 研究の方法

### 3.1 調査方法

まず、本稿の調査対象者を以下の表2に示す。

表2 調査対象者

調査対象者	人数(名)	年齢(平均)
JJ:日本の企業で事務職に就いている日本人会社員 <sup>5)</sup> 。	49名 (男:19名 女:30名)	22~44歳 (平均30歳)
JSL:日本の大学・大学院に留学している中国人学生 <sup>6)</sup> 。	107名 (男:26名 女:81名)	21~37歳 (平均26歳)
CC:中国の国営・民営の企業で、事務職に就いている中国人会社員 <sup>7)</sup> 。	59名 (男:33名 女:26名)	22~33歳 (平均25歳)

談話完成テスト (Discourse Completion Test、以下ではDCTと略す)とは研究協力者が与えられた状況において、自分ならどのように言うかを考え、実際に話すように書き込んでいくものである(李2006:56)。実際に会話の相手のいないDCTのような記述式調査では、断りという発話行為を相互行為として捉えることは難しい。しかし、DCTの利点として、ある言語の発話行為の典型を観察できること、大量の発話データを短期間で収集できること、様々な場面設定を組み込めることなどが挙げられる。さらに、Beebe and Cummings (1996)によれば、DCTでは実際の会話で使われる意味公式及びストラテジーを観察することができることとされている。これを検証するため、本稿における全てのDCTの課題をロールプレイ<sup>8)</sup>により調査した。その結果、ロールプレイで観察された意味公式及びストラテジーはDCTにおいても観察された。

したがって、本稿では、以上のようなDCTの利点を重視し、データの収集方法としてDCTを採用することにした。DCTの場面設定は、Brown and Levinson (1987)のポライトネス理論に基づき、話し手と聞き手の「社会的距離」を「親しい」と「疎遠」の2つに、聞き手の話し手に対する「力」を「目上の上司」と「同等の友達」の2つ<sup>9)</sup>に分けた。また、ある行為が「相手にかける負荷」については、上司の場合は「表作成(軽い)」と「残業(重い)」の2つを、友達の場合は「英訳のチェック(軽い)」と「借金(重い)」の2つをそれぞれ設定し、合計8場面からなるDCT(詳細は添付資料参照)を作成した。

先行研究には、「断ってください」のような誘導的な指示を出している研究がある一方で、出していない研究もある。本稿では、断るかどうかが議論の対象ではなく、断りパターンを考察することを目的とするため、DCTでは、「どう断りますか」と記載した。そのために、よりメタ語用論的意識が働き、実質運用から遠ざかった可能性はあるが、語用論的意識を見るという点では問題がないと考えられる。また、DCTでは、場

面の順序が回答に影響を与える可能性があるため、提示する場面の順序を変え、A、B、Cの3種類を用意した。さらに結果の原因を探るため、JSL10名に対し、中国語でフォローアップ・インタビューを行った。

### 3.2 データの分析方法

データの分析方法に関しては、比較語用論や中間言語語用論の先行研究 (Blum-Kulka and Olshtain 1984; Beebe, Takahashi and Uliss-Weltz 1990; 生駒・志村 1993; 藤森 1994; 伊藤 2004) でよく使われている意味公式による分析方法を用いた。まず、意味公式は、藤森 (1994) と伊藤 (2004) の分類を修正・補足した蒙 (2008) の分類に基づき、{結論} {言いよどみ} {理由} {詫び} {代案} {関係維持} {共感} {感謝} {情報} {条件} {承諾} {間投詞的表出} {ためらい・相づち} {呼称} {非難} {賞賛} {その他} の17に分類した。

本稿は次のように意味公式の分析を行った。まず、日本語の意味公式の分類基準をできる限り忠実に中国語に翻訳し<sup>10)</sup>、両者の内容に違いがないかどうかを確認するために、日本語を専攻している中国人の大学院生2名がチェックした。次に、JJとJSLの個々の発話データがどのタイプの意味公式であるかを、筆者および、日本語教育を専攻している日本人の大学院生2名と中国語教育を専攻している日本人の大学院生1名が独立に判断した。一方、CCのデータは、筆者、中国人の中国語アナウンサー1名、中国語に特に堪能である中国人<sup>11)</sup>1名、日本語を専攻している中国人の大学院生1名がJJとJSLのデータと同様の方法で判断した。なお、分類の過程において判断が分かれた場合は多数決とし、同数の場合は協議し、どうしても合意できない極少数の事例は筆者が最終判断を下した。なお、データに対する評定者間の一致度は、JJは89%、JSLは90%、CCは89.7%であった。

断りの切り出しにおいて、まずJJ、JSL、CCのグループごとに使用される意味公式の頻度を出した。次に、意味公式ごとに、8場面で3グループの合計頻度を計算した。最後に、その合計頻度から上位3位のものを取り出し、Web上の統計計算のサービスであるJavaScript-STARによるカイニ乗検定並びに残差分析を行い、統計的な有意性を検討した。また、断りの終結部についても切り出しと同様にデータ処理を行った。

## 4. 結果

まず、8場面の切り出しでJJ、JSL、CCともに最も多く使用される上

位3位のパターンの使用頻度を比較した結果について述べる。次に、同様に終結部の結果を述べる。

#### 4.1 断りの切り出しにおける量的差異

JJ、JSL、CCともに最も多く使用される上位3位のパターンは詫び先行型、理由先行型、ためらい・相づち先行型である。詫び先行型とは、「申し訳ない」のように相手の意向に添えないことを負担に感じている旨の表明から断りを切り出すパターンである。理由先行型とは、「明日どうしてもはずせない用事があるので」のように相手の意向に添えない理由の表明から断りを切り出すパターンである。ためらい・相づち先行型とは、「あのう」のように相手にためらいのポーズを表し、断り発話の発現を予測させる旨の表出、あるいは「そうですねえ」のように発話権が替わる時の表出から断りを切り出すパターンである。表3はカイニ乗検定と残差分析の結果である。

表3 JJ、JSL、CCの場面別先行パターン使用頻度(回)

パターン		詫び先行型	理由先行型	ためらい・相づち先行型
親しい友達：英訳のチェック	JJ	29 †	13	2
	JSL	47	24 *	10 *
	CC	8 **	21 **	0 †
疎遠な友達：英訳のチェック	JJ	31	17	1
	JSL	60	23	13
	CC	28	16	5
親しい友達：借金	JJ	15	11	5
	JSL	36 *	19 **	14
	CC	5 **	22 **	2
疎遠な友達：借金	JJ	26	13	3 *
	JSL	51	22	20
	CC	16 *	15	10
親しい上司：残業	JJ	26 *	11	1
	JSL	48 †	25 †	6
	CC	7 **	22 **	5 †
疎遠な上司：残業	JJ	30 *	10	0 †
	JSL	52	24	7
	CC	15 *	16 *	3
親しい上司：表作成	JJ	22	14	1 †
	JSL	47	16 **	11 †
	CC	9 *	13 **	2
疎遠な上司：表作成	JJ	21	16 *	0 †
	JSL	61 †	15 **	7
	CC	24	12	3

\*\* $p < .01$  \* $p < .05$  † $p < .10$  下線で示したのは使用頻度が有意に多い場合であり、網掛けで示したのは使用頻度が有意に少ない場合である。

次に、JJ、JSL、CCの場面別切り出しパターンの使用傾向を比較する。どのような場面でJSL、CC、JJに違いが表れるか、また、CCとJJに比

べて JSL にはどのような語用論的特徴が見られるかに焦点を当て考察を行う。

表 3 にみるように、親しい友達に英訳のチェックを頼まれる場面では詫び先行型、理由先行型、ためらい・相づち先行型の使用頻度には JJ、JSL、CC の間で有意差が見られた ( $\chi^2(4)=21.552, p<.01$ )<sup>12)</sup>。残差分析の結果、まず詫び先行型に関しては CC の使用頻度が有意に少ないが、JSL はこの母語の干渉を受けず、JJ に近づく傾向にある。次に理由先行型においては CC の使用頻度が有意に多いのに対して、JSL の使用頻度は CC に反して有意に少ない。最後に、ためらい・相づち先行型に関しては CC には全く使用されていないが、JJ と JSL には使用され、特に JSL には過剰に使用されている。一方、比較的疎遠な友達に英訳のチェックを頼まれる場面では詫び先行型、理由先行型、ためらい・相づち先行型の使用頻度には JJ、JSL、CC の間で有意差は見られなかった ( $\chi^2(4)=6.205, n. s.$ )。

また、親しい友達に借金を頼まれる場面では JJ、JSL、CC の間に切り出しパターンの選択に有意差が見られた ( $\chi^2(4)=20.288, p<.01$ )。残差分析の結果、詫び先行型、理由先行型の使用は JSL と CC で正反対の傾向が見られた。つまり、詫び先行型の使用頻度に関して CC は有意に少ないが、JSL は有意に多い。また、理由先行型の使用では CC が有意に多いのに対して、JSL は有意に少ない。一方、疎遠な友達に借金を頼まれる場面では JJ、JSL、CC の間に切り出しパターンの選択において有意差は見られなかった ( $\chi^2(4)=8.095, n. s.$ )。

親しい上司に残業を頼まれる場面においては、表 3 で示したように、JJ、JSL、CC の間で切り出しパターンの選択に統計的な相違が見られた ( $\chi^2(4)=20.484, p<.01$ )。残差分析の結果、詫び先行型の使用においては JJ より CC が有意に少ないのに対して、理由先行型の使用においては JJ より CC が有意に多い。また、JSL は詫び先行型、ためらい・相づち先行型の使用に関しては JJ と CC のどちらにも類似しておらず、その中間に位置することが示唆された。そして、JSL は JJ と CC に比べて理由先行型をより少なく使用する有意傾向が見られた。一方、疎遠な上司に残業を頼まれる場面においては、JJ、JSL、CC の間に有意差は見られなかった ( $\chi^2(4)=9.566, n. s.$ )。それに対して、上司に表作成を頼まれる場面では、JJ、JSL、CC の切り出しパターンの選択には有意差は見られなかった (親しい関係 :  $\chi^2(4)=12.382, n. s.$  ; 疎遠な関係 :  $\chi^2(4)=10.596, n. s.$ )。

最後に、以上で見られた JSL の語用論的特徴に関して、JSL にフォローアップ・インタビューを行った。その結果、JSL は日本語と中国語における切り出しパターンの相違を既に認識していたため、できる限り中国語のパターンを避けて、日本語のパターンを使おうとする意識から、結果的に過少または過剰に使用していることが分かった。

#### 4.2 断りの終結部における量的差異

JJ、JSL、CC とともに最も多く使用される上位 3 位のパターンは代案終結型、理由終結型、結論終結型である。代案終結型とは、「日曜日であれば、出られますが」、「他の人に頼んでみたらどう」のように相手との関係を維持したいために行う積極的な働きかけを含む表現により、断りを終結するパターンである。理由終結型とは、「明日は用事があります」のように相手の意向に添えない理由の表明により、断りを終結するパターンである。結論終結型とは、「行けない」、「作れない」のように直接的な断り表現により、断りを終結するパターンである。表 4 はカイニ乗検定と残差分析の結果である。

表 4 JJ、JSL、CC の場面別終結パターン使用頻度(回)

パターン		代案終結型	理由終結型	結論終結型
親しい友達：英訳のチェック	JJ	15	9	8
	JSL	40	28	10
	CC	27	11	5
疎遠な友達：英訳のチェック	JJ	8	10	11
	JSL	17 †	32 *	17
	CC	21 **	11 *	11
親しい友達：借金	JJ	14	5 †	15 **
	JSL	39	27 *	11 *
	CC	28	11	8
疎遠な友達：借金	JJ	8	8 **	16 **
	JSL	6 **	46 **	10 *
	CC	21 **	18 *	9
親しい上司：残業	JJ	13	5 †	19
	JSL	19 †	22	38
	CC	18	14	13 *
疎遠な上司：残業	JJ	7	8	22
	JSL	10 *	23	38
	CC	17 *	18	17 **
親しい上司：表作成	JJ	21 *	6	12 **
	JSL	59	21	4 *
	CC	38	8	3
疎遠な上司：表作成	JJ	26	3 *	14 **
	JSL	49	24 **	9 †
	CC	35	8	5

\*\* $p < .01$  \* $p < .05$  † $p < .10$  下線で示したのは使用頻度が有意に多い場合であり、網掛けで示したのは使用頻度が有意に少ない場合である。

次に、切り出しパターンと同様に、JJ、JSL、CC の場面別終結パターンの使用傾向を比較し、JSL の語用論的特徴を考察する。

表 4 にみるように、英訳のチェックを頼まれる場面では親疎に関わらず、代案終結型、理由終結型、結論終結型の使用頻度には JJ、JSL、CC の間で有意差は見られなかった(親しい関係： $\chi^2(4)=4.803, n.s.$ ；疎遠な関係： $\chi^2(4)=9.443, n.s.$ )。一方、借金を頼まれる場面では親疎関係ともに JJ、JSL、CC の間に終結パターンの選択に有意差が見られた(親しい関係： $\chi^2(4)=15.646, p<.05$ ；疎遠な関係： $\chi^2(4)=36.159, p<.01$ )。残差分析の結果、親疎関係ともに結論終結型の使用に関しては JJ が有意に多いのに対して、JSL が有意に少ない。また、親しい関係の場合、JSL は JJ と CC より理由終結型を過剰に使用している。それに対して、疎遠な関係の場合、まず代案終結型の使用頻度においては CC が有意に多いが、JSL が有意に少ない。そして、JJ と CC の理由終結型の使用頻度は有意に少ないが、JSL は有意に多い。

上司に残業を頼まれる場面においては、表 4 で示したように、親疎に関わらず JJ、JSL、CC の間で終結パターンの選択に有意差が見られなかった(親しい関係： $\chi^2(4)=8.539, n.s.$ ；疎遠な関係： $\chi^2(4)=10.327, n.s.$ )。それに対して、上司に表作成を頼まれる場面で、親疎関係ともに JJ、JSL、CC の終結パターンの選択には統計的な違いが見られた(親しい関係： $\chi^2(4)=21.410, p<.01$ ；疎遠な関係： $\chi^2(4)=17.742, p<.05$ )。残差分析の結果、親しい関係の場合、代案終結型の使用は JJ が有意に少ないのに対して、JSL は JJ と CC の中間である。また、結論終結型の使用は JJ が有意に多いが、JSL が有意に少ない。一方、疎遠な関係の場合、理由終結型の使用は JJ が有意に少ないが、JSL が有意に多い。また、結論終結型の使用は JJ が有意に多いが、JSL が JJ と CC に比べて少なく使用する有意傾向が見られた。

最後に、以上で見られた JSL の語用論的特徴に関して、JSL にフォローアップ・インタビューを行った。その結果、まず、代案終結型の使用に関して、JSL は中国語、日本語ともに、疎遠な相手よりも親しい相手に対して代案終結型をより多く使うが、日本人に対しては、相手との親疎関係によってどの程度代案終結型を使用すればよいかがよく分からなかったため、結果的に親しい相手に対しては JJ と CC の中間に位置するのに対し、疎遠な相手に対しては過少に使用することが分かった。また、結論終結型の使用に関して、JSL は日本語では直接的な断り表現はあまり好まれないことを既に知っており、できる限り避けようと意識し

たため、結果的に結論終結型を過少に使用することが分かった。さらに、理由終結型の使用に関して、JSL は自分の母国文化と異なる文化を持つ日本人に対して誤解を与えないように、断りの最後に十分に理由を説明する必要があるという気持ちから、目標言語、母語ともに使用されることが少ない理由終結型を結果的に過剰に使用することが分かった。

要するに、断りの切り出しと終結パターンで観察された JSL の目標言語に対しての過剰使用、過少使用、あるいはケースによっては、JSL が JJ と CC の中間に位置するという結果は、これまでの先行研究で観察されていない上級学習者の語用論的特徴であると考えられる。このことから、上級学習者の中間言語の独自性、すなわち、母語でも、目標言語でもない特徴の存在が統計的に検証できたと言える。

## 5. 考察

本研究の調査結果を Brown and Levinson (1987) のポライトネス理論から考えるとどのようなことがいえるだろうか。Brown and Levinson (1987) の公式によれば、相手のフェイス侵害度 (FT 度) は話し手と聞き手の「社会的距離 (D)」、聞き手の話し手に対する「力 (P)」、特定の文化においてある行為  $x$  が相手にかける負荷度の絶対的順位に基づく重み ( $R_x$ ) の和であり、FT 度の大小がストラテジーの選択に影響を与える要因となる。フェイス侵害行為を行わざるを得ず (FTA)、言語で明示的に表現する場合は、FT 軽減行為を行うか行わないかに分かれる。つまり、FT 度が比較的小さい場合は FT 軽減行為が行われなく、「直接的に言う」というストラテジーが選択されやすい。本稿の結論終結型がこれに該当すると考えられる。しかし、FT 度が大きくなるにつれ、FT 軽減行為が行われ、「ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー」から「ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー」への順に選択されやすくなる。「ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー」とは、他人から邪魔されたくないというネガティブ・フェイスに配慮したストラテジーである。本稿の詫び先行型とためらい・相づち先行型がこれに該当すると考えられる。一方、「ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー」とは、他人に好かれたい、あるいは認められたいというポジティブ・フェイスに働きかけるストラテジーである。本稿の理由先行型、理由終結型と代案終結型がこれに該当すると考えられる。

まず、断りの切り出しにおいて、疎遠な相手に断る場合、JJ、CC、JSL が見積もる FT 度に差がなかったため、ストラテジーの選択に差はなか

った。一方、親しい相手に断る場合、JJ、CC、JSLが見積もるFT度に差があったため、ストラテジーの選択に差があった。すなわち、CCは、JJとJSLに比べて、FT度が最も小さいと見積もったため、理由先行型のポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを使用したのである。それに対して、JJは、CCより、FT度がより大きいと見積もったため、詫び先行型、ためらい・相づち先行型のネガティブ・ポライトネス・ストラテジーを使用した。最後に、JSLは、CCとJJに比べて、FT度が最も大きいと見積もったため、JJよりも詫び先行型、ためらい・相づち先行型のネガティブ・ポライトネス・ストラテジーを強化して使用した。

次に、断りの終結部において、同等の相手に対して、負荷度が軽いと想定される依頼、または目上の相手に対して、負荷度が重いと想定される依頼を断る場合、JJ、CC、JSLが見積もるFT度に差がなかったため、ストラテジーの選択に差はなかった。一方、同等の相手に対して、負荷度が重いと想定される依頼、または目上の相手に対して、負荷度が軽いと想定される依頼を断る場合、JJ、CC、JSLが見積もるFT度に差があったため、ストラテジーの選択にも差が見られた。すなわち、JJは、CCとJSLに比べて、FT度が最も小さいと見積もったため、結論終結型の「直接的に言う」というストラテジーを使用したのである。一方で、CCは、JJよりFT度がより大きいと見積もったため、代案終結型のポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを使用した。最後に、JSLに関しては、JJよりもFT度がより大きいと見積もったため、理由終結型のポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを使用した。

以上のように、JJ、CC、JSLのFT度の差がRxの程度の差によるものであると考えられる。これについては今後の課題としたい。

## 6. おわりに

本稿では断りの切り出しと終結部に焦点を当て、中国人日本語上級学習者、社会人の日本語母語話者と中国語母語話者の場面別断りパターンの使用頻度を比較し、その差に統計的な有意性を検討した。その結果、中国人日本語上級学習者の語用論的特徴が以下のように統計的に検証できた。

- (1) 断りの切り出しには、親疎関係による3者の有意差が見られた。学習者は親しい相手に対して、詫び先行型またはためらい・相づち先行型を日本語母語話者と中国語母語話者の中間位置に使用したり、日本語母語話者に比べて過剰に使用したりするが、理由先

- 行型を日本語母語話者に比べて過少に使用する傾向がある。
- (2) 断りの終結部には、依頼内容による3者の有意差が見られた。学習者は同等の相手に借金を依頼される場面と目上の相手に表作成を依頼される場面では、代案終結型を日本語母語話者と中国語母語話者の中間位置に使用したり、日本語母語話者に比べて過少に使用したりするが、理由終結型を日本語母語話者に比べて過剰に使用する。また結論終結型を日本語母語話者より過少に使用する傾向がある。

今後は日本語学習者の習熟度などの要因も考慮に入れ、断りを相互行為として捉え、発話データを収集することにより考察を続けていきたい。

### 謝辞

本稿の執筆にあたっては、指導教官の木下徹先生にご指導を賜り、査読者・編集委員会の方々には貴重なコメントをいただいた。また、調査を行う際、二川原マサ子氏、友人の王欢さん、贾彦香さん、覃莹さん、刘恋さん、翁弈翎さんと Aye Monmyat さんにはご協力をいただいた。友人の水野真紀さんには日本語の面でアドバイスをいただいた。この場を借りて心より感謝申し上げる。

### 注

- 1) 生駒・志村(1993)では、意味公式とは、「謝罪」「言い訳」「代案」等、人がものを断るときに使う言葉を、その意味内容によって分類したものであると指摘している。
- 2) 藤森(1994)では、意味公式は発話行為を分析する際の単位として定義されている。それは発話を社会的相互作用の中で見た場合の発話行為具現化のための最小の機能単位だと考えられる。例えば、{詫び}という意味公式は、「相手の意向に添えないことを負担に感じている表出」という意味機能を果している。意味公式は{ }と表記する。
- 3) Rongtheera(2004)では、意味公式が[ ]で示されている。
- 4) 日中両言語において統計的な有意差が見られるかどうかを考察するため、少なくとも上位3位までのパターンを明示し、統計的な有意差に言及する必要があると考える。
- 5) 日本の企業で事務職に就いているため、日本の会社の社会文化的規範を会得していると考えられる。
- 6) 全員日本語能力試験1級に合格しており、上級レベルに該当する。
- 7) 中国の企業で事務職に就いているため、中国の会社の社会文化的規範を会得していると考えられる。

- 8) 4組（2人1組で、8名）にロールプレイを行った。
- 9) 本稿では、目下との力関係よりも目上と同等との力関係を維持することがより困難であると考えられるため、目上と同等との力関係を取り上げて考察した。
- 10) 今回、日本語版の意味公式分類基準を用いて中国語のデータを分析した際に、日本語にはない中国語独自のものはなかった。
- 11) この中国人は社会人としてのキャリア歴が長く、対外的な文書を作成する仕事をしており、言語感覚が優れている。
- 12) 本稿では、危険率の希薄化の問題に関しては、今回のような場面では、8つの場面及び、1つ1つのセルの残差分析全てを、多重比較のケースと見なし、 $8 \times 9 = 72$ 回の繰り返しがあったと見なすという最も保守的な立場を取る。その上で、危険率の調整に関しては全体として、ボンフェローニの方法による調整済5%、または1%水準で有意差を判断する。

#### 参考文献

- Beebe, L. M. and Cummings, M. C. (1996) "Natural Speech Act Data versus Written Questionnaire Data: How Data Collection Method Affects Speech Act Performance" In S. M. Gass and J. Neu (Eds.), *Speech Acts across Cultures: Challenges to Communication in a Second Language* pp. 65-83. New York: Mouton De Gruyter.
- Beebe, L. M., Takahashi, T. and Uliss-Weltz, R. (1990) "Pragmatic Transfer in ESL Refusals" In Scarcella, R. C., Andersen E. S., and Krashen S. D. (Eds.), *Developing Communicative Competence in a Second Language* pp. 55-73. Rowley, MA: Newbury House Publishers.
- Blum-Kulka, S. and Olshtain, E. (1984) "Requests and Apologies: a Cross-cultural Study of Speech Act Realization Patterns (CCSARP)" *Applied Linguistics*, 5, pp. 196-213.
- Brown, P. and Levinson, S. (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage* Cambridge: Cambridge University Press.
- Canale, M. and Swain, M. (1980) "Theoretical Bases of Communicative Approaches to Second Language Teaching and Testing" *Applied Linguistics*, 1, pp. 1-47.
- 藤森弘子 (1994) 「日本語学習者に見られるプラグマティック・トランスファー: 『断り』 行為の場合」『名古屋学院大学日本語・日本語教育論集』 1, pp. 1-19.
- Hymes, D. (1972) "On Communicative Competence" In J. B. Pride and J. Holmes (Eds.), *Sociolinguistics* pp. 269-293. London: Penguin Books.
- 生駒知子・志村明彦 (1993) 「英語から日本語へのプラグマティック・

トランスファー：『断り』という発話行為について』『日本語教育』79, pp. 41-52.

伊藤恵美子 (2004) 『マレー語母語話者のポライトネスの諸相—勧誘・依頼行為に対する返答を中心に滞日期間の観点から』名古屋大学大学院国際開発研究科博士学位論文

李善姫 (2006) 「日韓の「不満表明」に関する一考察—日本人学生と韓国人学生の比較を通して」『社会言語科学』8-2, pp. 53-64.

蒙韞 (2008) 「中国人日本語上級学習者の語用論的転移の一考察：依頼に対する断り表現のポライトネスの表し方から」『国際開発研究フォーラム』36, pp. 241-254.

岡崎眸 (1995) 「日本語学習者における語用論上の転移再考」『東京外国語大学論集』50, pp. 97-109.

Roungtheera Wanwimon (2004) 「タイ人日本語学習者の「提案に対する断り」表現における語用論的転移—タイ語と日本語の発話パターンの比較から」『日本語教育』121, pp. 46-55.

関山健治 (2004) 「第二言語習得語用論の潮流とこれからの英語教育（シンポジウム 第2言語習得語用論）」『語用論研究』6, pp. 47-55.

山口和代 (1997) 「コミュニケーション・スタイルと社会文化的要因：中国人及び台湾人留学生を対象として」『日本語教育』93, pp. 38-48.

資料：談話完成テスト (Discourse Completion Test) の設問

「場面1」水曜日の午後7時。あなたは仕事が終わって帰る途中です。そのとき、携帯が鳴りました。携帯に出ると、友達のAさんでした。

Aさん：ねえ、今晚暇？

あなた：何か用？

Aさん：日本語から英語に訳した資料がA4で20枚ぐらいあるんだけど、訳をチェックしてもらえない？明日の朝、出さないといけなから。

(あなたは英語が得意なのですが、今晚は恋人または家族と映画を見に行く約束があります。)

①

あなた：

②

あなた：

「場面2」金曜日の午後6時。あなたは仕事が終わって帰ろうとしているところ、B課長に呼ばれました。

B課長：今週中に終わらせなければならぬ仕事はまだたくさん残っているんだけど、明日(土曜日休みの日)、仕事に入ってくれないか。

(最近仕事が大変で、あなたは体がとても疲れていて明日は休みたいで

す。)

①もし B 課長が普段あなたとあまり話すことのない上司なら、どう断りますか

あなた：

②もし B 課長があなたと親しい上司なら、どう断りますか

あなた：

「場面 3」日曜日の午前 11 時頃。あなたは朝寝坊して起きたばかりです。その時、ドアのベルが鳴りました。ドアを開けると、C さんでした。C さんは慌てていて何か用事がありそうです。C さんを部屋の中へ招き入れようとしたのですが、C さんは部屋に入らないで玄関のところで話し始めました。

C さん：あのう、ちょっとお願いがあるんだけど。

あなた：え、何？

C さん：実は、今月お金を全部使っちゃって、部屋代とかを明日までに払わなければならなくて困っているんだけど、出来れば～万円ぐらい貸してくれないかなあ。

(もしその金額があなたの 1 ヶ月の生活費の半分以上だったとしたら)

①もし C さんがあなたの普通の友達なら、どう断りますか

あなた：

②もし C さんがあなたと仲のいい友達なら、どう断りますか

あなた：

「場面 4」月曜日の午後 3 時頃。会社員のあなたは一生懸命仕事をしています。今日午後 6 時までに終わらせなければならない仕事をたくさんかかえています。締め切りが迫ってきてとても忙しい時、D 課長が来ました。

D 課長：悪いけど、この表をすぐ作ってほしいんだけど。

①もし D 課長があなたと親しい上司なら、どう断りますか

あなた：

②もし D 課長が普段あなたとあまり話すことのない上司なら、どう断りますか

あなた：

(名古屋大学大学院国際開発研究科)